

世界遺産をデザイン！ ～花「桜」と共に生きる吉野山プロジェクト

春・秋連結学期 | 今出川校地開講科目

1. 目的・概要

the purpose and an outline

私たち「吉野山プロジェクト」は、奈良県吉野郡が誇る桜で有名な世界遺産である吉野山の閑散期の観光活性化の方法について、年間取り組んできました。桜以外の観光資源として、本プロジェクトでは山岳信仰文化が育んできた、吉野山の方の人情味やぬくもりに着目し、「Home Town Yoshinoyama」というテーマを掲げました。まるで故郷のようにあたたかく人々を迎え入れる吉野山の人々を知ってもらうことで、桜の時期だけでなく、いつでも吉野山を訪れてもらおうと考えました。



吉野山は修験道の開祖である役小角が開いた山であり、昔から多くの行者が立ち寄る土地でした。そして、過酷な修行に疲れた彼らを吉野山の方々はあたたかく迎え入れてきたのです。いまなお吉野山を訪れた際に感じられる人情味やぬくもりは、昔から文化として築かれてきた吉野山の特色の一つです。私たちは閑散期における吉野山の観光活性化には、このあたたかさの文化に注目する必要があると考えました。

「Home Town Yoshinoyama」を多くの観光客の皆さんに感じていただくために、私たちは「ふれあい期間」の導入と吉野葛を使用した「スイーツレシピコンテスト」を実施しました。

「ふれあい期間」とは、閑散期に吉野山を訪れる観光客の人々に、現地の方々と様々なふれあい(例えば、ほら貝ふき体験や、旅館の女将さんとの交流)を通して、心も体もあたたまる交流をして欲しい、との目的から提案させていただいた期間のことです。「スイーツレシピコンテスト」は、吉野葛をはじめとした吉野山の文化を紹介し、「ふれあい期間」を通して吉野山を訪れるきっかけとなることを目的としました。

📅 annual schedule

2013年 10月14日～11月11日	「スイーツレシピコンテスト」を開催し、11月に吉野山にて審査会を2回行い、全16点の応募作品の中から大賞レシピを選びました。
10月17日～12月10日	ふれあい期間提案を観光協会に対して行いました。その提案に賛同していただける方々の確認と取材を、吉野山観光協会の全店舗、宿泊施設、金峯山寺等にクラス全員で行い、取材原稿や写真をまとめて冊子作成をしました。
11月26日～11月28日	「吉野葛」の認知度アップとふれあい期間を体験する京都・室町二条「さいりん館」でのイベントの広報を目的とし、同志社EVEに「葛鍋」を出店しました。
12月17日	京都・室町二条「さいりん館」を一日貸しきって、吉野山の人々との触れ合いの場を設けました。

2. 成果達成度

the achievement degree

企画1 ふれあい期間の導入

「あたたかい吉野山の人」をもっと広く知ってもらうという目的から、ふれあい期間の導入を吉野山観光協会へ提案しました。この企画は、2014年1月より試験的に採用されます。これは、吉野山に既存の冬のイベント「鬼火の祭典」等と併せることで、長く吉野山に残るものを目指しました。その一環として、私たちは「吉野山の人々のおもてなしの心」をテーマにした学生手作りの冊子を作成しました(右写真参照)。旅館は21件、寺社は2件、商店については88件のお店に取材をかけ、全36ページの冊子となりました。

また、ふれあい期間を体感してもらうことを目的に、12/19(木)に京都・室町二条「さいりん館」を貸し切り、ふれあい期間紹介のイベントを行いました。当日は吉野山観光協会の方々および金峯山寺の方が、8名も京都にお越しください、私たちとともに、作成した冊子の紹介、ほら貝吹き体験や、学生による能楽披露、「葛リン」(後述)や葛鍋の提供など行いました。当日は平日昼間にもかかわらず50名のご来場となりました。参加していただいた方から「吉野山に行きたくなった」との声をいただきました。このイベントの広報活動は、地道なビラ配り、イブ祭での発信に加えて、NPO法人世界遺産アカデミーに協力を依頼し、会員5000名への情報発信もしていただきました。



企画2 吉野葛プリン「葛リン」の開発

スイーツレシピコンテストにより、吉野葛を使用したレシピを広く集めました。市内に調理師系専門学校を展開する大和学園グループの料理教室や専門学校、奈良女子大学、近畿大学、京都女子大学といった食物、栄養系学部を持つ外部大学にも協力依頼の交渉をし、学生へのコンテスト参加を声掛けしてもらうことができました。結果として、16点の応募レシピが集まり、千葉県在住主婦の方のレシピ「葛を使ったプリン」が開発される商品レシピとなりました。試作段階では吉野山の方々、右京区の「手作りの洋菓子処 むっしゅくれむ」にアドバイスをいただきました。完成したものは「葛リン」と名付け、吉野山内の「吉野荘 湯川屋」「景勝の宿 芳雲館」「太鼓判花夢・花夢」の3つの旅館で提供していただくこととなりました。

以上の二つの企画に対するフィードバックを「さいりん館」を訪れた方々にアンケートを取り、集計・分析を行うことで行うことができました。参加者の9割から「このイベントを通じて、吉野山を身近に感じるようになった」との回答が得られ、「吉野山に行きたくなった」という声もいただきました。この結果は、実際に文化を継承していく人々やその文化にふれあってもらうことが訪問したい気持ちを高めるのに効果的だという私たちの考えと一致しました。冊子は、観光協会の方から高い評価をいただき、今後各店舗、宿泊施設で多様な活用ができると喜んでいただいています。「葛リン」は、味と提供の仕方について改善点もまだまだ多く、吉野山に定着まで現時点で至っておらず問題点をふり返る必要があると考えています。しかし、本プロジェクトは首尾一貫、吉野山観光協会と協調しながら、活動を行ってきました。二つの企画に対して、当初積極的でなかった観光協会の方々、のべ100回を超える現地へのクラスメンバーの訪問という私たちの熱意により、葛に対する認識、おもてなしの心の大切さに対する認識に変化が起きたと言われています。その結果、30以上の観光協会会員の方がふれあい期間に賛同してくださり、冊子掲載許可をいただきました。このことは私たちが残せた大きな成果だと感じます。

3. プロジェクトを通じて

through a project

突然人員が足りなくなり、なかなか作業が進まない等、本当に紆余曲折がありました。しかし厳しい状況の中だからこそ、「逆境にどう耐え、どう立ち向かうか」という強靱な精神と粘り強さを養えたと思います。ピンチの時にこそ、メンバーはそれぞれの真価を発揮し、すすんでリーダーシップをとる者、地道に作業をこなしていく者、モチベーションを保つために盛り上げる者、…それぞれがそれぞれの持ち味を発揮し、このプロジェクトの成功となりました。全体的な傾向として、アンケートからも、特に「忍耐力」や「サポーターシップ」を養えたと感じているメンバーも多いです。



【編集後記】

私たちはプロジェクトを通して、「吉野山の人々」の温かさを様々な場面で実感しました。企画書を吉野山の方々に見せるときや、一緒にスイーツについて真剣に議論したとき、吉野山のお店に取材をかけた際に良くしてもらったとき、といった具合に、思い返せばキリがありません。私たちは「吉野山の人々」の温かさを伝える立場だったのですが、気づけば温かさを受ける立場にいたようです。お世話になった先生方、吉野山の皆さん、本当にありがとうございました。そして最後になりましたが、吉野山プロジェクトのメンバーの皆さん、一年間本当にありがとうございました。

【プロジェクトメンバー】

中安 百合恵(文3) 花井 美奈(文3) 雪田 恵子(文3) 石河 誉行(文4) 門馬 さや(文4) 大谷 京佳(法2) 大垣 健太(法3)
日向 勇人(経済2) 小南 理華(商3) 竹中 研司(政策2) 安田 萌(政策2) 片山 大輔(政策3) 小林 智之(TA)